

挑む

モノづくり ヒトづくり

を含む多品種少量品に需要が急増しても柔軟に対応できる。各機械を、技能者一人ひとりが1、2台ずつほぼ占有し、プログラミングを含めて担当している」

—各技能者に個々の機械を任せる理由は。

「プログラミング中は機械が停止し投資効率は悪い。しかし同じ機種でも癖が異なり、稼働後の時間帯で調子も変わる。一品ずつの最適な加工には加工条件の微調整が必要だ。当社には生産技術部門がない。各技能者が熟知した機械で、より良い方法を常に考える」

—技能者をどう育てていますか。

「定まった教育制度はない。実践が基本。製造やマシンングセンター、研部門なら入社後すぐ、機械を操作させ簡単な加工をさせる。当社では『モノづく



早川精機工業社長
白井 洋氏

自主性重視、多品種少量部品 柔軟に

りを楽しむ』が創業以来の伝統で、企業理念にも盛り込んだ。難易度の高い多品種少量生産ができるのも面白い。自主性や意欲、好きにやれる雰囲気大切にしている」

—設備投資にも積極的です。

「現場が『ほしい』という機械はすぐ承認するし、『やりたいこと』はやってもらう。機械を買ってくれと言った社員は効果が出るよう工夫するし、ロボットシステムを独学で内製した社員もいる。ただし成果を急かさないことも大事。遠回りでも、もがいて身に付けたものが役に立つこともある。毎日現場を回り、社員と話しつつ、成長を少し気長に待っている」

—課題は。

「『楽しむ』を本当にできている社員は実は少ない。例えばマネージャーには工場の全体最適のため新たな挑戦をし、その達成感を楽しんでほしい。今の担当を続けたい」という社員を尊重する一方、工程全体を理解できる人材も必要で、一部で担当のローテーションも始めた。若手社員の視野を広げるため、工場見学などの機会を増やしている」